

【 復活讃詞 第2調 】



しせざるいのちよ、なんぢしにくだりし
死生、命、爾死降
と、き、かみのせいひかりにてぢご
時、神、性、光、地獄
くをころせり。しせしものをちかよ
殺、死、者、地下
りふくかつせしめしとき、てんぐんみな
復活、時、天軍皆
よびていえり、いのちをたもうしゅ
呼、日、生、命、賜、主
ハリストスわがかみよ、こうえいはなんぢに
吾、神、光、榮、爾
き、す。

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 】



こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
光榮、父、子、聖、神、歸、今
いつもよよに、アミン。
何時、世、世
しととひとしくどうぎなるもの、ちゅう
使徒、等、同、座、者、忠



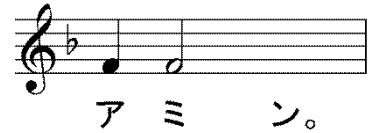
司祭) (黙誦： ^{せい かみ せいじゃ うち いこ} 聖なる神、^{せいさん こえ もつ かしよう} 聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
^{さんえい ことごと てんぐん ふくはい ばんぶつ む ゆう} ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と
^{ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ} なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
^{ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい} 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行う者を棄てずして、其救の爲に痛悔
^{た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい} を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
^{さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの} る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と
^{しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ} なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
^{もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ} 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と

せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい
を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる

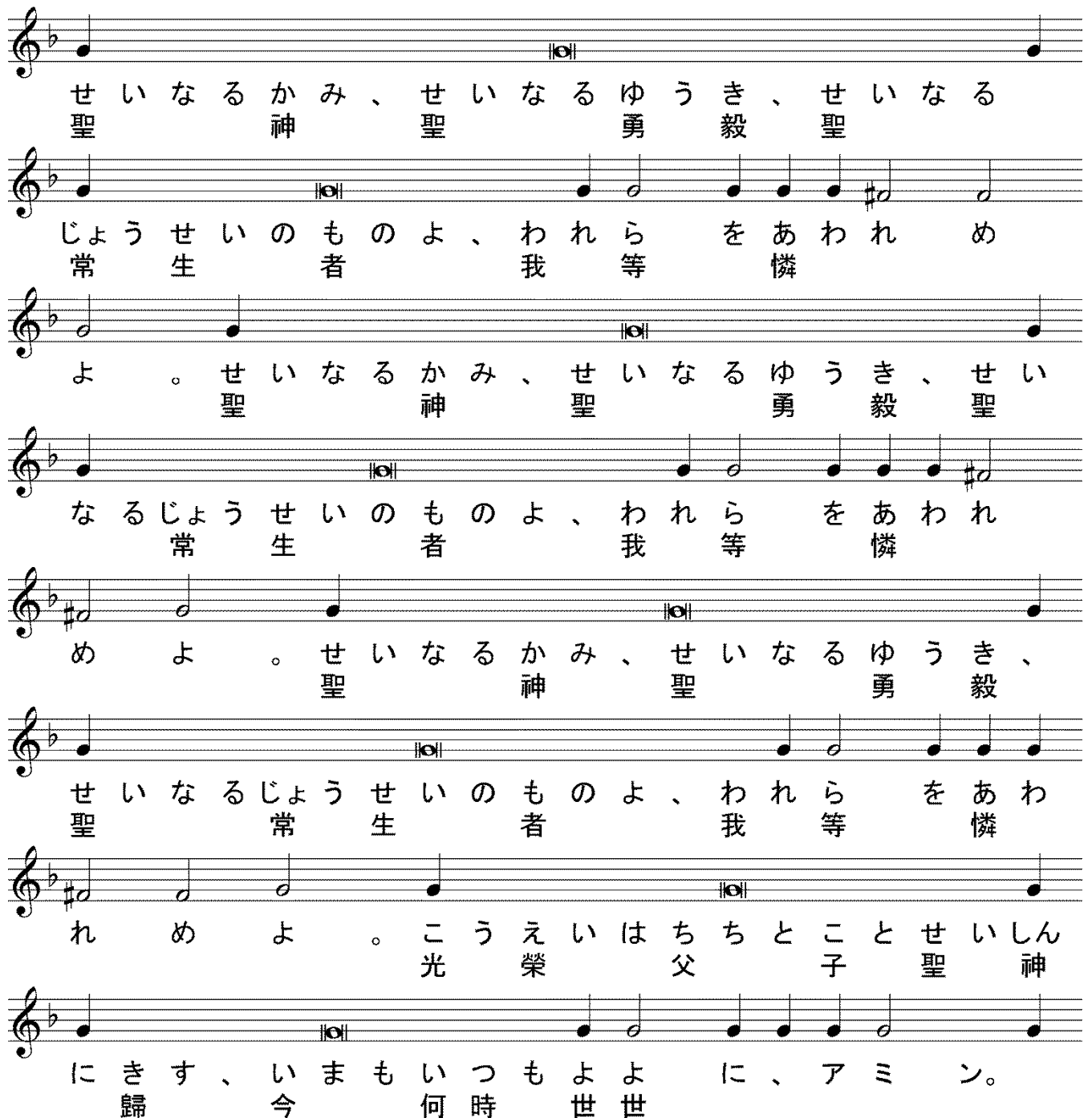
しょうしんぢょ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ
生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】



せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
聖なる神 聖なる勇毅 聖
じょうせいのもものよ、われらをあわれめ
常生者 我等 憐
よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
聖なる神 聖なる勇毅 聖
なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ
常生者 我等 憐
めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
聖なる神 聖なる勇毅
せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ
聖常生者 我等 憐
れめよ。こうえいはちちとことせいしん
光榮 父子 聖神
にきす、いまもいつもよよに、アミン。
歸 今 何時 世世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
 聖 神 聖 勇
 き 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を
 殺 聖 常 生 者 我 等
 あ わ れ め よ 。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 提綱 (プロキメン) 主日第2調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。
 爾 神

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主は、我が力、我が歌なり、彼は我が救となれり、

しゅ は わ が ち か ら 、 わ が う た な り 、 か れ は わ
 主 我 力 我 歌 彼 我
 が す く い と な れ り 。
 救

誦經) 主は厳しく我を罰したれども、我を死に付さざりき、



しゅ は わ が ち か ら 、 わ が う た な り 、 か れ は わ
 主 我 力 我 歌 彼 我



が す く い と な れ り 。
 救

誦經) ^{しゅ わ ちから わ うた} 主は、我が力、我が歌なり、



か れ は わ が す く い と な れ り 。
 彼 我 救

【 使徒經 (アポストロス) 194 端 コリンプ後書 11 章 31 節~12 章 9 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと じん たつ こうしょ よみ} 聖使徒パヴェルがコリンプ人に達する後書の讀、

司祭) ^{つつし き} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい かみ われら しゅ ちち よよ しゅくさん もの わ いつわ} 兄弟よ、神、我等の主イイススハリストスの父、世に祝讚せらるる者は、我が謊

^{し おい おう まちづかさわれ とら ほつ まち まも}らざるを知る。ダマスキに於て、アレタ王の邑宰我を執えんと欲して、ダマスキの邑を守

^{われかご もつ まど かき したが つ おろ かれて のが ほこ わ}れり、我筐を以て牖より牆に循い、縋り下されて、彼の手を脱れたり。誇ることは我が

^{ため えき ところ けだしわれしゅ けんげん もくし およ われ あ いちにん し}爲に益する所なし、蓋我主の顯現と默示とに及ばん。我ハリストスに在る一人を知

^{こ ひと じゅうよねんぜん にくたい あ し にくたい ほか あ し かみ}る、此の人は十四年前に、(肉體に在りてか、知らず、肉體の外に在りてか、知らず、神

^{これ し だいさんちゅう てん あ われこ ひと おい その にくたい あ にくたい}之を知る、)第三重の天に擧げられたり。我此の人に於て、其(肉體に在りてか、肉體

^{ほか あ し かみこれ し らくえん あ い がた ことば ひと かた あた}の外に在りてか、知らず、神之を知る、)樂園に上げられて、道い難き言、人の語る能わ

^{もの き し われか ごと ひと もつ ほこ おのれ もつ ほこ あるい われ よわ}ざる者を聞きしを知る。我此くの若き人を以て誇らん、己を以て誇らず、或は私の弱

^{ほこ われも ほこ ほつ むち もの な けだしまこと い しか}きを誇らんのみ。我若し誇らんと欲せば、無智なる者と爲らず、蓋眞を言わん、然れど

^{われみづか いまし おそ ひと われ み ところ あるい われ き ところ す われ はか}も我自ら戒む、恐らくは人、我に見る所、或は我に聞く所に過ぎて、我を擬ら

^{もくし しいだい よ わ たか ため ひとつ とげ わ にくたい あた}ん。默示の至大なるに因りて我が高ぶらざらん爲に、一の棘は我が肉體に與えられたり、

すなわち つかい われ う ため わ たか ため われみたびしゅ これ われ
 即 サタナの使 なり、我 を撃たん爲、我が高ぶらざらん爲なり。我三次主に之を我よ
 はな もと しか しゅ われ い われ おんちよう なんぢ た けだしわれ
 り離さんことを求めたり。然れども主は我に謂えり、我の恩寵は爾に足れり、蓋我
 ちから よわ うち おこな ゆえ われむしろあま わ よわ ほこ ちから
 の能は弱き中に行わる。故に我寧甘んじて我が弱きを誇らん、ハリストスの能の
 われ うち やど ため
 我の内に寓らん爲なり。

(比較用 口語訳) 永遠にほむべき、主イエス・キリストの父なる神は、わたしが偽りを言っていないことを、ご存じである。ダマスコでアレタ王の代官が、わたしを捕えるためにダマスコ人の町を監視したことがあったが、その時わたしは窓から町の城壁づたいに、かごでつり降ろされて、彼の手からのがれた。わたしは誇らざるを得ないので、無益ではあろうが、主のまぼろしと啓示とについて語ろう。わたしはキリストにあるひとりの人を知っている。この人は十四年前に第三の天にまで引き上げられた——それが、からだのままであったか、わたしは知らない。からだを離れてであったか、それも知らない。神がご存じである。この人が——それが、からだのままであったか、からだを離れてであったか、わたしは知らない。神がご存じである——パラダイスに引き上げられ、そして口に言い表わせない、人間が語ってはならない言葉を聞いたのを、わたしは知っている。わたしはこういう人について誇ろう。しかし、わたし自身については、自分の弱さ以外には誇ることをすまい。もっとも、わたしが誇ろうとすれば、ほんとうの事を言うのだから、愚か者にはならないだろう。しかし、それはさし控えよう。わたしがすぐれた啓示を受けているので、わたしについて見たり聞いたりしている以上に、人に買いかぶられるかも知れないから。そこで、高慢にならないように、わたしの肉体に一つのとげが与えられた。それは、高慢にならないように、わたしを打つサタナの使なのである。このことについて、わたしは彼を離れ去らせて下さるようにと、三度も主に祈った。ところが、主が言われた、「わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる」。それだから、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、アリルイヤ、

【 アリルイヤ 主日第2調 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

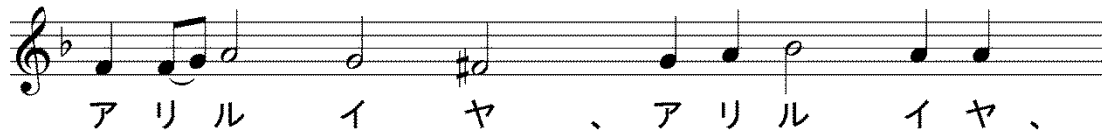
アリル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、



誦經) ^{ねが}願わ^{しゅ}くは主^{うれい}は憂^ひの日に於^{おい}て爾^{なんち}に聴^きき、^{かみ}イアコフの神^なの名^{なんち}は爾^{ふせ}を扨^{まも}ぎ衛らん、



誦經) ^{しゅ}主よ、^{おう}王を救^{すく}え、^{またわれら}又我等^{なんち}が爾^よに呼^{とき}ばん時^{われら}、我^き等に聴^{たま}き給え、



司祭) (黙誦: ^{ひと}人を愛^{あい}する主^{しゅ}宰^{さい}よ、^わ我が心^{こころ}に神^{かみ}を知^しる智^ち慧^えの ^い浄^きき光^{ひかり}を輝^{かが}かし、^わ我が思^し念^{ねん}

^めの目^{ひら}を啓^{なんち}きて、爾^{ふくいん}が福^{おしえ}音^{さと}の教^{たま}を悟^わらしめ給^{うち}え、我^{なんち}が衷^{ふく}に爾^{いましめ}の福^{たま}たる誠^{まこと}を

^{おそ}畏^{おそれ}るる畏^いをも入^{われら}れて、我^{ことごと}等^{にくたい}が悉^{よく}くの肉^ふ體^{およ}の慾^{なんち}を踏^{よろこ}み、凡^{ところ}そ爾^{ところ}の喜^{よろこ}ぶ所^{ところ}

を思^{おも}い且^かつ行^{おこな}いて、屬^{ぞくしん}神^{せい}の生^す活^{いた}を過^{たま}ぐるを致^{けだし}させ給^{かみ}え、蓋^{かみ}ハリス^{かみ}トス神^{かみ}よ、

^{なんち}爾^わは我^{たましい}が靈^{からだ}と體^{こうしょう}との光^{われらなんち}照^{なんち}なり、我^{むげん}等^{ちち}爾^{しせい}と爾^{しぜん}の無^{しぜん}原^{しぜん}の父^{しぜん}と至^{しぜん}聖^{しぜん}至^{しぜん}善^{しぜん}にし

て生^{いのち}命^{ほどこ}を施^{なんち}す爾^{しん}の神^{こうえい}とに光^{けん}榮^{いま}を獻^{いつ}ず、今^{よよ}も何^{よよ}時^{よよ}も世^{よよ}世^{よよ}に、ア^{よよ}ミ^{よよ}ン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) ルカ福音書35端 8章5~15節 】

司祭) ^{えいち}睿^{つつし}智^た、^{せい}肅^{せい}みて立^{せい}て聖^{せい}福^{せい}音^{せい}經^{せい}を聴^きくべし、^{しゅうじん}衆^{へいあん}人^{へいあん}に平^{へい}安^{あん}、



司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。
爾 歸

司祭) 謹みて聴くべし、

司祭) 主は左の譬を設けて曰えり、播く者は其種を播かん爲に出でたり、播く時路の旁に

遺ちし者あり、乃 踐まれたり、又天空の鳥之を啄めり。石の上に遺ちし者あり、萌え
出でて稿れたり、潤澤なきが故なり。棘の中に遺ちし者あり、棘共に長びて、之を蔽
えり。沃壤に遺ちし者あり、萌え出でて、實を結ぶこと百倍せり。之を言いて呼べり、耳あ
りて聴くを得る者は聴くべし。其門徒彼に問いて曰えり、此の譬は何ぞ。彼曰えり、爾
等には神の國の奥義を知ること與えられたれども、他の者には譬を用いる、彼等視れども
見ず、聴けども悟らざる爲なり。此の譬の義は左の如し、種は神の言なり。路の旁
の者は、是れ聴けども、後悪魔來りて、其心より言を奪う、彼等が信じて救われざ
らん爲なり。石の上の者は、是れ聴く時喜びて言を受くれども、己に根なくして暫
く信じ、誘惑の時に背く。棘の中に遺ちし者は、是れ聴きて去り、而して度生の
おもんばかり 慮 と貨財と宴樂とに蔽われて、實を結ばず。沃壤に遺ちし者は、是れ言を聴きて、
清潔良善なる心に之を守り、忍耐して實を結ぶ。之を言いて呼べり、耳ありて聴く
を得る者は聴くべし。

(比較用 口語訳) 主は一つの譬で話をされた、「種まきが種をまきに出て行った。まいているうちに、ある種は道ばたに落ち、踏みつけられ、そして空の鳥に食べられてしまった。ほかの種は岩の上に落ち、はえはしたが水気がないので枯れてしまった。ほかの種は、いばらの間に落ちたので、いばらも一緒に茂ってきて、それをふさいでしまった。ところが、ほかの種は良い地に落ちたので、はえ育って百倍もの実を結んだ」。こう語られたのち、声をあげて「聞く耳のある者は聞くがよい」と言われた。弟子た

ちは、この譬はどういう意味でしょうか、とイエスに質問した。そこで言われた、「あなたがたには、神の国の奥義を知ることが許されているが、ほかの人たちには、見ても見えず、聞いても悟られないために、譬で話すのである。この譬はこういう意味である。種は神の言である。道ばたに落ちたのは、聞いたのち、信じることも救われることもないように、悪魔によってその心から御言が奪い取られる人たちのことである。岩の上に落ちたのは、御言を聞いた時には喜んで受け入れるが、根が無いので、しばらくは信じていても、試練の時が来ると、信仰を捨てる人たちのことである。いばらの中に落ちたのは、聞いてから日を過ごすうちに、生活の心づかいや富や快樂にふさがれて、実の熟するまでにならない人たちのことである。良い地に落ちたのは、御言を聞いたのち、これを正しい良い心でしっかりと守り、耐え忍んで実を結ぶに至る人たちのことである。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
 主 光 榮 爾 歸 し 光 榮

はなんぢにきす。
 爾 歸 す。

※聖体礼儀3（金口イオアン）へ